

【シンポジウム「人間の尊厳について」提題】

人間の尊厳とは何か －看護倫理の領域から考える－

相原 博

はじめに

本稿の目的は、人間の尊厳概念の歴史的解明とともに、看護におけるこの概念の意味の解明にある。

周知のように、ヨーロッパの先進諸国では、近代的な設備の整った病院でも患者の虐待や残酷な処置が発生している。あるいは死者についても、その遺体が無造作に放置されることがあるという。だが虐待や残酷な処置が起こる度に、人間の尊厳に訴える非難が見出される。すなわち、虐待によって患者の尊厳が侵害されたというのである。

それでは、人間の尊厳とは何を意味するのか。まず尊厳は、英語では dignity、ドイツ語では Würde、フランス語では dignité の訳語にあたる。だがそれぞれの言葉は、その他にも「威厳」や「品位」、「気高さ」や「厳粛さ」、さらには「名声」や「名誉」、「地位」あるいは「高位」などの意味をもつ。そのため、訳語は必ずしも統一されていない。また人間の尊厳の意味について、看護の現場のみならず看護倫理学の領域でも、明確な合意は存在しない。人間の尊厳について、むしろ議論は混乱するばかりである。そのため尊厳概念は、もはや不要であると批判されることもある⁽¹⁾。そこで本稿では、西洋哲学における尊厳概念をもとに、人間の尊厳の意味を改めて解明する。

本稿は以下の順序で進める。第一に、キケロの尊厳概念を論じる。第二に、キリスト教の伝統、とりわけアキナスの尊厳概念を論じる。第

三に、尊厳概念の意味の転回点として、ルネサンス以降の近代哲学を取り上げる。第四に、人間の尊厳について近年の研究を説明する。第五に、看護における尊厳侵害の事例を紹介し、看護における人間の尊厳の意味を解明する。

一 キケロの尊厳概念

マルクス・トゥリウス・キケロにとって、尊厳 *dignitas* は古代ギリシア語 *axiôma* の訳語である。もともと *axiôma* は、評価や名声、名誉あるいは栄誉を意味した。そのため *axiôma* は、ある人間の地位や優れた行為をもとに、特定の人間にのみ認められた。こうした状況がストア派の登場とともに変わる。ストア派の哲学者たちは、理性を備えた人間に認められる内的価値として *axiôma* を理解した。彼らによれば、ロースないし理性のおかげで人間は、自分の欲望や願望から距離をとることができる。そして、欲望や願望から距離をとる可能性が、人間に内的価値を与えると考えられた。この考えがキケロにも影響している²⁾。

キケロもまた、理性をもとに人間の尊厳を理解する。そのためキケロにあっても、尊厳はもっぱら評価や名声を意味せず、人間の地位や優れた行為にも関係しない。むしろ尊厳は、理性が与えられていることを根拠に、すべての人間に認められる。こうして尊厳は、ストア派やキケロをとおして、すべての人間に帰属するものになった。さらにキケロの考えには、人間にとって望ましい生の理想が含まれる。すなわち、人間は快楽に溺れてはならず、その尊厳にふさわしく生きなければならないとされる。

『義務について』のなかで、キケロは次のように述べる。すなわち、

「身体的な快楽は、人間の優位にふさわしいといい切れるものでなく、むしろ蔑視し、排せらるべきである。それに若干の価値をおくとしても、その享受に一定の限度がなくてはならない。従って身体の保持保養の目的も健康のためであり、体力のためであって、快楽

のためであってではない。われわれが自然界において持つ優位と価値(dignitas)の性質を考えるだけでも、奢侈に流れ繊弱柔弱な快樂にふけることが如何にみにくく、節欲、恒心、厳肅、真剣に生きることの、如何に高貴であるかを知ることができよう。」⁽³⁾

このように、身体的な快樂は人間の尊厳にふさわしいと言えず、むしろ排除すべきである。身体的な快樂は、あくまで健康や体力のために認められるにすぎない。人間の尊厳を考慮すれば、快樂に夢中になることは醜く、欲望を抑え節度をもって生きることが高貴である。したがって、キケロにとって人間の尊厳には、ある種の生の理想が含まれることは間違いない。

二 キリスト教の伝統における尊厳概念

人間の尊厳は、キリスト教の伝統にも見出される。『聖書』によれば、神は自身の「像」にしたがって人間を創造し、他の被造物を服従させた⁽⁴⁾。この「神の似像(imago dei)」という考えに、人間の尊厳が結びついている。そのため、キリスト教の伝統によれば、尊厳は神によって、すべての人間に平等に分け与えられている。この神に由来する尊厳については、様々な議論が展開されてきた。本稿では、トマス・アクィナスの考えを取り上げる。

トマスもまた、「神の似像」をもとに尊厳を理解する。トマスによれば、人間が「神の似像」であることは、人間が知性と意志をもち、自由に行為できる点に認められる。人間は他の被造物とは異なり、自由な行為の主体である。そのため、意志の自由が人間に尊厳を与える。もっとも人間は、キケロの場合と同じく、尊厳にふさわしく生きなければならない。もし罪を犯せば、人間は尊厳を失う。『神学大全』には、次のように書かれている。

「人間は罪を犯すことによって理性の秩序から脱落する。したがっ

て、彼は人間が自然本性的に自由であり、自己自身のために存在しているかぎりにおいて有する人間的尊厳(dignitas humana)を喪失し、ある意味で非理性的動物と同じ隷属状態に転落する。」⁽⁵⁾

このように、人間は罪を犯すことで、人間としての尊厳を失う。すると「神の似像」であることは、他の被造物とは異なる人間の自然本性を意味するだけではない。むしろそれは、満たされるべき神との「契約」としても理解できる⁽⁶⁾。そのため、人間が「神の似像」であることも、無条件に認められるわけではない。むしろ人間は、「神の似像」であるべく努力しなければならない。その意味で人間は、努めて「神の似像」であるかぎりでのみ、尊厳をもつことになる。こうして、トマスの考える尊厳もまた、ある種の生の理想を含意すると言うことができる。トマス自身の言葉を借りれば、次のとおりである。

「かくして不節制は、次の二つの理由から最も非難されるべきである。第一に不節制は、人間の有する卓越性に最も反するからである。上述のごとく、不節制は我々と獣とに共通な快楽に関わっているのだからである。〔中略〕第二に不節制は、人間の有する輝かしさや美しさに最も反するからである。不節制の関わる快楽のうちにあっては、徳の輝きや美しさ全体を成立させる理性の光が、ほとんど現われ出ることはないからである。」⁽⁷⁾

不節制は、動物と共通の快楽に関わるので、人間の卓越性に最も反する。またこの快楽には理性の働きが看取できないため、不節制は人間の輝かしさや美しさに最も反する。このように不節制を非難する見解には、尊厳という言葉こそ使われていないが、たしかに生の理想を読み取ることが可能である。

三 ルネサンス以降の近代哲学における尊厳概念

ジョヴァンニ・ピコ・デラ・ミランドラには、『人間の尊厳について』という著作がある。そのなかでピコは、世界における特別な地位を人間に与える、人間の自由について語る。ピコによれば、人間は自由意志をもつ「造形者」である。もっとも人間の尊厳は、善をも悪をも自由に選択できる能力に基づく。そのため、トマスの場合とは異なり、たとえ人間が罪を犯したとしても、その尊厳は失われない。次の引用文には、善悪のどちらも選ぶことのできる、人間の自由が読み取れる。

「アダムよ、われわれは、おまえに定まった席も、固有な相貌も、特有な贈り物も与えなかったが、それは、いかなる席、いかなる相貌、いかなる贈り物をおまえ自身が望んだとしても、おまえの望み通りにおまえの考えに従って、おまえがそれを手に入れ所有するためである。〔中略〕われわれは、おまえを天的なものとしても、地上的なものとしても、死すべきものとしても、不死なるものとしても造らなかったが、それは、おまえ自身のいわば「自由意志を備えた名誉ある造形者・形成者(arbitrarius honorariusque plastes et fictor)」として、おまえが選び取る形をおまえ自身が造り出すためである。」⁽⁸⁾

このように、人間の自然本性は不定である。それは、人間が自由意志によって自分の自然本性を決定すべきだからである。人間は自分の人生にかんして、いわば神に似た創造者である。そのため、たとえ人間が墮落したとしても、自由意志によって自ら決定したかぎり、人間の尊厳は失われない。こうしてキケロやアキナスとは異なり、ピコによって初めて、人間の尊厳が喪失不可能なものとして考えられたのである。

さらに人間の尊厳は、イマヌエル・カントの哲学をとおして、ある種の規範の根拠として理解される。カントによれば、人間は実践理性をもち、自分の行為の根底にある規則を検討できる。すなわち、自分の行為

の規則がすべての人間に妥当するかどうか、人間は自ら考える。それによって、人間は道徳的に行為することが可能である。このように、自分の行為の規則がすべての人間に妥当するかどうか検討を要求するのが、定言命法に他ならない。カントは、この定言命法が義務の根拠であり、あらゆる人間の理性に備わると考えた。人間なら誰でも、定言命法に従って行為すべきであり、また行為することが可能である。こうした、自ら定言命法を設定して、それに従うことが自律である。そしてこの自律に、人間の尊厳が基づく。『道徳形而上学の基礎づけ』のなかで、カントは次のように述べる。

「道徳的に善い心術もしくは徳にこれほど高い要求をなす権利を与えるものは、いったいなんであろうか。それは、道徳的に善い心術もしくは徳が、理性的存在者に与える普遍的立法への関与にほかならないのであって、この関与を通じて理性的存在者に可能な目的の国の成員の資格を与えるのである。〔中略〕と言うのも、なにものも法則がそのものに定める価値のほかには、価値をもつことはないからである。ところですべてのものに価値を定める立法そのものは、まさにそのゆえに尊厳を、すなわち無条件的で比較を絶した価値をもたざるをえないのであって、この価値に対しては、尊厳(Würde)という言葉だけが、それについて理性的存在者がなすべき評価の適切な表現を与えるのである。それゆえ、自律が、人間およびあらゆる理性的存在者の尊厳の根拠である。」⁽⁹⁾

このように、道徳的に善い心術に最高の価値を与えるのは、自分の行為の規則がすべての人間に妥当するかどうか検討する法則を立てること、つまり普遍的立法への関与である。また誠実に約束を守ることや自分の規則に基づく好意の価値を定めるのも、この普遍的立法への関与である。すると、それらに価値を定める普遍的立法は、無条件的で比較を絶した価値をもたなければならない。そのため、自ら普遍的な法則を立てそれに従うことこそが、人間とあらゆる理性的存在者の尊厳の根拠になる。

こうして人間は、尊厳という無条件で比較不可能な価値をもつので、

尊重されなければならない。言い換えれば、尊厳をもつ人間は、たんなる手段として扱われてはならないのである。

四 近年の研究

カント以後、二つの世界大戦を経て、人間の尊厳という概念が俄に注目されるようになった。それは、大戦における拷問や虐待、大量殺戮など、想像を絶する暴虐行為への反省による。そして近年の研究について言えば、屈辱という否定的な経験をもとに、尊厳を「自尊の念 (self-respect)」として理解する哲学者がいる。その代表がアヴィシヤイ・マルガリートである。

マルガリートは、ナチスによるユダヤ人迫害を実例として、人間の尊厳とは何かを解明している。その実例とは、1938 年の「水晶の夜」において、ユダヤ人が歯ブラシで道路掃除を強制された事件である。『品位ある社会』のなかで、マルガリートは次のように述べている。

「もちろん、ある種の状況で私たちは質問するかもしれない。他の誰も屈辱を与えないとは思わない事柄によって、ある人が屈辱を受けたと考えるのはどうしてなのか、その理由を質問するかもしれない。

〔中略〕だがウィーンの広場で、ナチスの兵隊がユダヤ人に〔歯ブラシで〕舗道を洗うよう強制した時に、どうして自分の価値が貶められたと思うのか、その理由を質問することは馬鹿げている。もしこれが屈辱(humiliation)でないとすれば、それは一体何だというのか？」⁽¹⁰⁾

マルガリートにとって、ある人間に屈辱を与えるとは、その人間の「自尊の念」を攻撃することに他ならない。上記の事件で言えば、ナチスの兵隊は、歯ブラシで道路を清掃させ笑いものにすることで、ユダヤ人の「自尊の念」を破壊したことになる。

では「自尊の念」とは何であろうか。マルガリートによれば、「自尊

の念(self-respect)」とは、ある人間が人間であることの意識だけをもとに、自分自身に認める「敬意(honor)」である。そのため「自尊の念」は、他者による確認を必要とする「自負心(self-esteem)」から区別される。「自尊の念」を得るため、人間は他者による承認という仕方で、自分以外の権威をそもそも必要としない。また「尊敬(respect)」が、人間を平等に扱う根拠になるのに対して、「評価(esteem)」は人間に順位をつける根拠をなす。こうして「自尊の念」と「自負心」とは区別可能になるという⁽¹¹⁾。

このように、「自尊の念」と「自負心」を区別した上で、マルガリートは人間の尊厳の意味を明らかにする。すなわち、尊厳とは「自尊の念」の表現であり、ある人間が人間としての自分自身に感じる、尊敬の感情の表現に他ならない。あるいは尊厳は、ある人間の自分自身に対する態度が「自尊の念」に基づいている、このことを証明する行動傾向である。その意味で、ナチスの兵隊は屈辱を与える「行為」でもって、犠牲となったユダヤ人の尊厳を侵害したことになる⁽¹²⁾。

五 看護における尊厳侵害からの考察

さて前節まで、古代から現代にいたる主要な哲学者について、その尊厳概念を解明した。それでは、看護の現実を考慮するならば、人間の尊厳はどのような意味で理解すべきであろうか。はじめに、尊厳概念が看護の現場でどのように使用されているか、確認する。そこで、イギリスの一般新聞『ガーディアン』の記事「尊厳への最期の訴え」に注目する⁽¹³⁾。記事の内容は次のとおりである。

すなわち、ある精神分裂病の患者が、腹部と背部に重い癌を患い、もはや治療不可能な末期の状態にある。この患者は、また精神分裂病の治療のため、抗精神病薬の注射を受けてきた。そこで患者は、家族の助けもあり、注射でなく錠剤での投薬を要望する。やせ衰えた筋肉に強制的に注射を受けることは、屈辱であるだけでなく、さらなる苦痛を引き起こすからである。また強力な精神安定剤は体力を消耗させ、患者が情熱

を抱き続けてきた絵画の作成を困難にするからである。ところが、看護師と精神科医は、この要望を無視し強制的に注射を行った。その際にこの患者は、抗精神病薬の注射を拒絶すれば精神病院に連れ戻す、と脅迫されたのである。抗精神病薬の注射が患者の精神を破壊することは、家族もよく知るところである。そのため家族は憤慨して、この患者が残りの日々を「尊厳をもって(with dignity)」生きることが望んでいる。

このように、注射に代わる治療法の要望が拒絶され、患者の尊厳ある生が侵害された、という内容である。これは、強制的な治療によって屈辱を受け、患者が尊厳を失った事例として理解できる。ではこうした看護の文脈において、人間の尊厳はどのような意味で理解されているのだろうか。前節までに解明した諸見解について、それぞれの妥当性を検討する。

第一に、古代ギリシアで尊厳は、評価や名声、名誉あるいは榮譽を意味した。またキケロにとって尊厳は、理性によって自分の欲望や願望から距離をとる可能性に基づいた。それだけでなく、尊厳は望ましい生の理想も含意した。ところが、上記の看護の文脈では、尊厳は名声や名誉でないのはもちろん、望ましい生の理想を含む意味でも理解されていない。患者の要望が拒絶され、治療を強制されることで損なわれたのは、患者の名声や名誉ではない。また自分の欲望や願望から距離をとり、理性に従って生きることの価値でもない。したがって、古代ギリシアやキケロの尊厳概念は、この看護の場合に当てはまらない。

第二に、キリスト教の伝統では、人間の尊厳は、人間が「神の似像」であるという考えに基づいた。またトマスも「神の似像」という考えに従って、人間が自由に行うことができる点に尊厳を認めた。すると上記の事例について、患者の尊厳は、キリスト教の伝統と一致する意味で理解できるかもしれない。トマスによれば、意志の自由が人間に尊厳を与えた。そのため、患者の尊厳の侵害は、患者の意志の否定を意味すると理解できるからである。もっとも、トマスの尊厳概念も生の理想を含意したことを考えれば、やはり看護の場合とは異なる意味になる。トマスにとって、人間が尊厳を失うのは罪を犯すからである。そのため意志の否定は、尊厳を失うこととは無関係であることになる。こうして、トマスの尊厳

概念もまた、この看護の場合に当てはまらない。

第三に、ピコによれば、人間は自由意志をもつ造形者であり、その尊厳は、善をも悪をも自由に選択できる能力に基づいた。人間本性は定まっておらず、人間は自由意志によって自分の自然本性を決定すべきであった。そのため、人間がどのような選択をして、どのような存在へと自分を形成したとしても、その尊厳は決して失われない。これを考慮すれば、ピコの尊厳概念が、上記の看護の事例に当てはまらないことは明白である。というのは、この事例では、強制的な治療によって患者の尊厳が失われた、と考えられているからである。このように、古代からルネサンスまでの尊厳概念は、いずれも看護の文脈での尊厳を適切に言い当てていない。そこで次節では、残された見解を検討する。

六 残された見解の検討

本節では議論の順序を変え、まずマルガリートの見解から検討する。マルガリートによれば、人間の尊厳とは「自尊の念」の表現であり、ある人間が人間としての自分自身に感じる、尊敬の感情の表現であった。するとマルガリオートの尊厳概念は、上記の看護の事例に当てはまると思われる。事例の患者は、自分の意志が尊重されず、強制的に注射されたことを屈辱として理解していた。そのかぎりでは、マルガリオートの見解は妥当するように思われる。すなわちこの患者は、強制的な注射という屈辱を与える行為でもって、その尊厳が侵害されたと理解できるであろう。このようにマルガリオートの見解が、この事例における患者の尊厳を言い当てていると思われる。けれども、この見解には大きな問題がある。

看護の事例では、患者の家族は、患者が尊厳をもって生きることを望んでいた。ではなぜ尊厳は侵害されてはならず、尊重されなければならないのか。この問いに、マルガリオートは消極的な答えを与える。すなわち、尊厳の尊重には根拠がなく、むしろ人間に屈辱を与えないことだけに根拠が見出される。マルガリオートによれば、残酷さは究極的な悪であり、これを避けることがもっとも重要な道徳の命令である。ところで屈

辱は、身体的な苦しみから精神的な苦しみへと残酷さを拡張する。つまり屈辱は、精神にかかわる残酷さである。したがって、この残酷さを根絶しなければならない⁽¹⁴⁾。それでは、なぜ残酷さは究極的な悪であり、避けなければならないのか。マルガリートは、この問いに答えることができない。なぜなら、これがマルガリオートの議論の前提だからである。マルガリートは『品位ある社会』のなかで、人間が屈辱を受けたと考える根拠を与える仕方では振る舞わない、望ましい社会の諸条件を分析している。そのため、残酷さを避けなければならないことに、もはや根拠は見出されない。このように、マルガリオートの見解では、尊厳の尊重に根拠を与えることができない。

そこで議論を元に戻せば、尊厳の尊重を正当化するものは何であろうか。カントの見解がこの問いに回答を与えてくれる。カントによれば、尊厳とは無条件で比較を絶した価値であった。また自ら定言命法を設定してそれに従うこと、つまり自律こそが尊厳の根拠であった。この定言命法に従って、「困窮した他者を助けるために自分は何も提供しない」という規則を検討しつつ、カントは次のように説明している。

「かの格率に従って普遍的自然法則が十分成立できることが可能であるとしても、それでもこのような原理が自然法則としていたところで妥当することを意欲することは不可能である。なぜなら、こうしたことを決心する意志は自分自身と衝突するからで、それと言うのも、かれが他人の愛や同情を必要とする場合がいくらかでも生じ来るであろうし、その場合にかれは自分自身の意志から生じた上述の自然法則によって、自らが望む援助のあらゆる期待を自分から奪うことになろうからである。」⁽¹⁵⁾

「困窮した他者を援助しない」という規則は、すべての人間が従うことが可能である。貧しく苦しむ人間を誰もが見捨てる社会は、もちろん成り立つことができる。けれども、そうした社会を意欲することは不可能であるとカントは考える。というのは、どんな人間にも他人の愛と同情を必要とする場合が生じる。その場合に、他人の援助を意欲することと、

上の規則がすべての人間に妥当することを意志することとが矛盾するからである。

こうしてカントは、「困窮した他者を助けるために自分は何も提供しない」という規則に従ってはいけない、と結論する。するとカントの見解は、上記の看護の場合にも応用できる。すなわち、患者の意志に反して強制的に治療するという規則は、すべての看護師や医者が従うことができる。けれども、誰もが看護師や医者の言いなりになり、強制的に治療を受ける社会を意志することは不可能である。というのは、どんな人間も老いて病気になり、自分の意志が尊重される治療を必要とする場合がある。その場合に、自分が尊重される治療を意志することと、上の規則があらゆる場合に妥当することを意志することとが矛盾するからである。このように、カントの見解によって、尊厳の尊重を正当化できることになる。

おわりに

本稿では、人間の尊厳について哲学者の諸見解を取り上げ、看護の事例における尊厳の意味を明らかにした。およそ概略的な説明であったが、古代から現代まで、尊厳にかんする様々な見解が見出された。また患者の尊厳を尊重すべきという規範を考慮すれば、カントの尊厳概念は今日も放棄できない洞察を含むと言えることができた⁽¹⁶⁾。どんな人間であれ、知らぬ間に重い病気になり、他者による看護を必要とするかもしれない。その際、自分の意志の尊重を願わない人間はいないはずである。そのことを考慮すれば、看護における患者の尊厳は、誰もが考察すべき重要な課題である。

註

- (1) たとえば、R・マクリンの批判を参照されたい。Vgl. R. Macklin, Dignity is a Useless Concept. It means no more than respect for persons or their

- autonomy, in: *BMJ*, Vol. 327, 2003, pp. 1419-1420.
- (2) 尊厳概念の歴史について、本稿は以下の諸文献を参照している。Vgl. P. Schaber, *Menschenwürde*, Stuttgart 2012, S. 19-28, P. Tiedemann, *Was ist Menschenwürde? Eine Einführung*, Darmstadt 2006, S. 51-67, R. Van Der Graaf und J. JM Van Delden, Clarifying Appeals to Dignity in Medical Ethics from an Historical Perspective, in: *Bioethics*, Vol. 23, 2009, pp. 151-160.
- (3) Cicero, *De Officiis*. (『義務について』 泉井久之助訳、岩波書店、1961 年、60 頁)
- (4) Vgl. *Genesis*, 1, 26-27. (『旧約聖書』 中沢洽樹訳、『世界の名著 聖書』、中央公論社、1968 年、60 頁、1 章 26-27 節)
- (5) St. Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, II-II, Qu. 64, art. 2. (『神学大全 第 18 冊』 稲垣良典訳、創文社、1985 年、163 頁)
- (6) Vgl. Schaber, *a. a. O.*, S. 24.
- (7) Aquinas, *a. a. O.*, Qu. 142, art. 4. (『神学大全 第 21 冊』 渋谷克美・松根伸治訳、創文社、2011 年、248 頁)
- (8) G. Pico della Mirandola, *De hominis dignitate*. (『人間の尊厳について』 大出哲・阿部包・伊藤博明訳、国文社、1985 年、16-17 頁)
- (9) I. Kant, *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*, 1785, in: Akademie Ausgabe, Bd. 4, S. 435f. (『道徳形而上学の基礎づけ』 宇都宮芳明訳、以文社、2004 年、148-149 頁)
- (10) A. Margalit, *The Decent Society*, Cambridge/London 1996, p. 127.
- (11) Vgl. Margalit, *a. a. O.*, S. 44-48.
- (12) なおマルガリートは、侮辱(insult)と屈辱(humiliation)を質的に異なるものとして考えている。侮辱はある人間の社会的名誉を、つまり「自負心」を傷つける。これに対して屈辱は、ある人間の「自尊の念」を傷つけるという。
- (13) Vgl. A. James, Final Plea for Dignity, in: *The Guardian*, Wednesday 1 November 2000. なお筆者は、記事の内容を尊厳概念の使用にかんする典型的な事例として理解する。
- (14) Vgl. Margalit, *a. a. O.*, S. 84-88.
- (15) Kant, *a. a. O.*, S. 423 (同訳書、113 頁)
- (16) もっとも、カントの尊厳概念にも問題がないわけではない。カントが考えているのは人間の尊厳でなく、むしろ人格と呼ばれる特殊な存在者の尊厳である。すな

シンポジウム「人間の尊厳について」（相原・木阪・中畑）

わち、道徳法則に従って自分の行為を決定できる、理性的な存在者の尊厳である。
この人格という概念が、生身の身体をそなえた患者の存在を適切に把握できるかどうか、検討の余地がある。